『比較民俗研究』27. 2012／6

済州島のシンクッ（成巫儀礼）
—約30年間におけるその変容—

古谷野　洋子※

韓国ではシャーマンの祭儀をクッといい、クッを執行する司祭を済州島ではシンバンという。シンバンの成巫儀礼はシンクッと呼ばれ、14日間も連続してさまざまな儀礼が行われる。済州島では今でもさまざまなクッがシンバンによって行われているが、シンクッは長い間行われなかった。しかし、2011年10月13日より28日まで16日間にかけてシンクッが開催された。“約30年ぶり”のクンクッであり、かつまたシンクッであるという。

約30年という歳月の中で済州島の巫俗を取り巻く状況は変化している。今回のシンクッは正式には撮影と記録を目的とした「４タンクルクッ再現記録行事」である。主催がＫＢＳ済州島放送総局（以下、ＫＢＳと記す）、主管が済州伝統文化研究所協力機関、後援が済州特別自治道であった。４タンクルクッとは部屋の四方に神の坐す棚を４つ作るもので、クンクッのことをさす。クンクッには個人の家で行うクンクッとシンバンの家で行うシンクッとがある。つまり、シンクッもクンクッの一部であるといえる。ＫＢＳや済州伝統文化研究所（以下、研究所と記す）はクンクッの再現記録行事というが、シンバンや研究者の間ではシンクッという面が非常に注目視されていた。本稿もシンクッという面に注目し、約30年間におけるその変容に留意して済州島のシンクッについて論じたい。

1　済州島のシンクッ

シンバンは、村の共同体、あるいは個人の家のために、クッ、あるいはそれに準ずる祈りの儀礼を執行する。現在でも済州島ではさまざまなクッが村人や海女たちの主催によって行われている。立春の頃に行われる立春クッや堂クッ、旧暦２月にやって来るヨンドン神を祀るヨンドンクッ、旧暦２月から３月にかけて行われるヨワンクッ（龍王クッ）、チャムスクッ（潜女クッ）、夏に行われるペクチュン（百中）などである[1]。これらのクッの中には１日で終わるクッもあれば、数日かけて行われるものもある。

（1）クンクッとシンクッ

クッのなかで最も規模の大きいクンクッは、経験豊富なクンシンバン（大シンバン）を首シンバンとして、幾人かのシンバンたちによって14日間継続して行われる内容も豊かな巫俗祭祀であり、済州島の無形文化遺産となっている[2]。しかし、このように盛大に行われるクンクッは費用もかかり、近年ではめったに行われなくなった[3]。

※ 神奈川大学日本常民文化研究所特別研究員

前述したが、クンクッには個人の家で行うクンクッとシンバンの家で行うシンクッとがある。シンバンは生涯に３回、シンクッを行わなければならないとされている[4]。シンバンは神に仕えて生活の糧を得ているので、巫業で稼いだものは神へ返さなければならないとされているからである。これを“役礼”という。シンクッを行うシンバン（本主と呼ばれる）は家に先輩のシンバンたちを招き、２週間にわたりさまざまなクッを演じてもらう。このような“役礼”を捧げる回数から、シンバン社会で他のシンバンから認められていく。そのためシンバンは多大の費用をかけてシンクッを行う。

シンクッはさまざまな祭祀が挿入され複合的に作られたクッである。済州島のクッの形式と内容のほとんどが入っているといわれる。さらに、シンクッはシンバンのために行うクッであるため、このクッにはいくつかの特異な儀礼も含まれている。特異な儀礼とは、巫祖神（サムシワンあるいは堂主（タンジュ）ともいう）を招き入れ、本主が薬飯薬酒をいただき、背中にオインタイン（御印打印）を受け新しくシンバンとなる儀礼、及び怠惰な生活をするシンバンが失くした巫具を探し出すというシンバンの再生を演じるコブンメンドチルチムである。

（２）シンバンとシンクッ

文武秉「済州島＜クンクッ＞の慣行」（『済州クンクッ』2011年　収録）によると、シンバンの職能とは、司祭の職能、占師の職能、神託と霊媒の職能、呪医者の職能、俳優の職能に要約することができるという。このように多くの職能をもつシンバンにとって、シンクッを行うのは神に“役礼”を捧げることだけが目的ではない。シンバンたちにとってシンクッとは研鑽の場でもある。文によると、“順繰り、順繰りに連続したクッ”をクッの原理のとおり再現しながら、クッの法についての討論と元老シンバンとの相談を経て、今まで間違って覚えていた誤謬を是正・補完して、シンバンたちはクッの法を伝承していくのだという。一例として、新陽里の梁貞順シンバン（女性・1933年生まれ）の例を挙げよう[5]。梁氏はすでに３回のシンクッを行っている。第１回目のシンクッは梁氏がシンバンになってから５年後、39歳のときに行われた。この時には、先輩のシンバンたちが氏の家で15日間ほど泊りがけでシンクッを行ったという。２回目は40代のときに、３回目は50代前後になってから下道里の高福子氏と一緒にそれぞれ１週間くらいかけて行ったという。梁氏はシンクッを通していろいろなクッのやり方だけではなく、シンバンとしての姿勢も学んだという（金2010:29）。

シンクッは大勢のシンバンがそれぞれの技を持ち寄って、次々とクッを行っていくものである。梁氏・高氏両者の話によるとシンバン同士で協力し合ってシンクッを行ってきたというが、シンバン同士の協力体制がないとシンクッは行えない。下道里の高福子シンバン（1934年生まれ）は31歳のときシンバンの道に正式に入り、２年後の33歳のときに15日間のシンクッを行ったが、費用は７人のシンバンたちがボランティアでやってくれたという（済州島研究会2009：８）。シンバンの仲間がシンクッを行う母体となっているのである。

（3）シンクッの記録

ここでは、済州島のシンクッの記録を振り返り、シンクッがどのように行われてきたかをみてみたい。『済州島　シンクッ』（1989年　文：玄容駿・李男徳、写真：金秀男）は、1981年に東金寧里の文順實（徐順實）氏の家で行われたシンクッの記録である。金秀男の写真がシンバンや村人たちによって祝われるシンクッの雰囲気をよく伝えている。文順實氏は今回のシンクッの首シンバンを務めた徐順實氏のことである。この時の首シンバンは梁昌宝氏であった[6]。

1986年には新村里の金允洙・李貞子夫妻の家でシンクッが行われた。このときの首シンバンは秦富玉氏であったが、実質上の首シンバンは李中春氏であったといわれる[7]。このシンクッについては日本では野村伸一が「済州島の神クッ―壮大な神話世界へ」（『韓国の民俗戯　あそびと巫の世界へ』1987年　収録）「済州島のクッの芸能性」（『仮面と巫俗の研究』1999年　収録）などで報告している。さらに野村はホームページ（http://www.flet.keio.ac.jp/～shnomura/shinku）にシンクッについての詳細な報告・論考を載せている。なおこれらのシンクッやシンクッで行なわれたノリなどについては文武秉が『済州島クンクッ資料』（2001）、『済州民俗クッ』で報告している。以上の記録を、「表１：報告された二つのシンクッ」にまとめる。

表１：報告された二つのシンクッ

行われた年	日数	本主	首シンバン	報告している主な文献
1981 年	10 日間	文順實（徐順實）	梁昌宝	玄他『済州島　シンクッ』 玄『済州島巫俗の研究』
1986 年	14 日間	金允洙・李貞子	秦富玉 （実質的には李中春）	野村『韓国の民俗戯あそびと巫の世界へ』『仮面と巫俗の研究』、慶応大学ホームページ

※文武秉『済州島クンクッ資料』（2001）・『済州民俗クッ』（2003）にも両方の報告がある。

今回のシンクッは“約30年”ぶりのクンクッであり、またシンクッであるといわれた。しかし、今回のシンクッは正確には金允洙・李貞子氏のシンクッからは25年ぶりのシンクッであることがわかる。後述するが徐シンバン（文シンバン）が最初のシンクッを行ったのは1981年であった。徐氏は今まで４回のシンクッを行っているというが、1981年以降のシンクッはいつ行われたのかはわからない。おそらく、上述の記録以外にもシンクッは行われていたと考えられる。

今回のシンクッの本主である鄭公鐵氏によると“約30年”ぶりとはいうが、その間にもシンクッはあったという。ただし、シンバンの仲間うちでやっていたので普通の人はみられなかったのではないかという。また、これらのシンクッはクンクッの形式ではなかったともいう。堂主マジ（サムシワンマジ）をやるのがシンクッであり、堂主マジを行うには最低３タンクル（神の坐す棚を３つ作る）は必要であり、10日はかかる。４タンクルクッ（神の坐す棚を４つ作る）で、14日間行われるのがクンクッであるが、堂主マジを行えば３タンクルクッでもシンクッであ

る。つまりクンクッとはいえないかもしれないが、シンクッは行われていたのである。玄の報告した文氏（徐氏）のシンクッは10日間であった。実際には実情に応じた形でシンクッは行われてきたのであろう。それでも、近年のシンクッの数は少なかったのではないかと考えられる。

2．2011年のシンクッの概要

ここでは2011年のシンクッの概要を述べる。本来、シンクッを行うシンバン自身がシンクッにかかる費用を出し、自宅でシンクッを行う。しかし、前述のように2011年のシンクッはKBSが主催となり費用を負担し、全行程を撮影・記録した。

（1）「再現記録行事」としてのシンクッ

今回のシンクッは撮影のために、西帰浦市城邑民俗村のマバンド（馬房址　現在は無住の家である）を借りきって行われた。城邑民俗村とは昔からの集落のたたずまいが保存された地域であり観光地となっている[8]。シンクッの会場はいわば撮影のために区切られた特殊な空間であった。マバンドの入口には横断幕が張られ、幕には「４タンクルクッ再現記録行事」と書かれ、その下に日程と場所、さらに主管・主催・後援の団体名が書かれていた。４タンクルクッとはクンクッのことであり、シンクッもクンクッの一部であることはすでに述べた。室内の家具や供物の容器などはインチョンから運び入れたものであり、シンクッの終了後、返却されるとのことだった。ＫＢＳは『済州クンクッ』という冊子を製作し、参加者に配布した。同誌には文武秉が「済州島＜クンクッ＞の慣行」という数ページにわたる文章を載せている。題は「済州島＜クンクッ＞の慣行」であるが、内容はシンクッに関しての言及が多い。新聞社としては「漢拏日報」が取材を許可され、金ヨンサン記者が会場に詰めた。

シンクッの行われた城邑里は会場を提供するとともに、シンバンたちをはじめ参加者全員のため食事の賄いの人手もだした。会場の外にテントを２つ張って調理場と食堂として、城邑里の女性たちによって連日食事が提供された。神々に供えるご飯、焼き魚、ナムルなども城邑里の女性たちによってここで作られた。テントには里長もつめていて、村挙げての協力体制であった。

（2）クッを担ったシンバンたち

本主である鄭公鐵氏は西帰浦市モスルポの出身で35歳から巫業に従事してきた。現在52歳である。鄭氏の親族はキリスト教徒であったという。大学教育を受けたシンバンとしては最初のシンバンである。シンバンという職業はかつては卑しい職業と見做されていたので[9]、シンバン仲間には「大学まで行きながらパルチャ（宿命・定めのこと）を落として･･･」と評された。大学まで行った鄭シンバンの存在はシンバン仲間だけでなく、世間の注目を集めたに違いない。

鄭氏は大学の国文教育科在学中に演劇活動に参加していた。体制に批判的な演劇だったという。韓国では政治的発言の手段として演劇の中でクッを行う形式が学生たちの間で行われたが[10]、

その当時のことであろう。鄭氏は劇中でシンバンの役をとても上手に演じたので、この道に進むことを勧められたという[11]。鄭氏は、大学時代に演劇をしていたことと現在のシンバンの仕事は繋がりがあるという。巫業と芸能は関係があり、韓国にはクァンデという芸能人の歴史もあるという。

「漢拏日報」(2011. 10. 22) に掲載された記事「済州島シンクッは私たちが守る」(以下「漢拏日報」とのみ記す) によると、「鄭氏は大学に在学中、10.26事件と光州5.18民主抗争など一連の事件をめぐって、2学年を終えて休学し、道内あちこちをさまよった末、済州のクッに接した。以後、安仕仁シンバンから正式にクッを学んだ」という。その後、チルモリダンに参加し、金允洙シンバン (国家指定重要無形文化財芸能保有者) の教えを受け、ヨンドンクッ保存会で若い人々の指導も行っていた。北村里のヨンドンクッの首シンバンの役割も務めていた。

4.3事件は鄭氏の生まれる前の“事件”ではあるが、鄭氏の人生に大きな影響を与えている。鄭氏が初めてのクッをしたのは、1989年、第1回4.3事件慰霊祭であったという。4.3事件とは、1948年4月3日に済州島で起こった事件である。南だけの単独政府に反対して起こった武装蜂起であり、鎮圧部隊は焦土化作戦を展開し、遊撃隊 (パルチザン・ゲリラ) と住民を区別せず、無差別攻撃、集団虐殺を行ったので膨大な数の犠牲者を出した[12]。「漢拏日報」によると、「当時、師の安仕仁シンバンが慰霊祭のクッを行う予定であったが、この事を知った“国家安全企画部” (現　国家情報院) が安氏を拉致し釜山のあるホテルに1週間監禁したため、鄭シンバンが師に代わって慰霊のクッを繰り広げた」という。シンバンとなった鄭氏は日本にも仕事で来るようになった。鄭氏が語った話では、日本で最も印象に残っている仕事は対馬で行った4.3事件の犠牲者の慰霊のクッであったという。済州島から流された多くの犠牲者の死体は対馬に流れ着いた。

今回のシンクッの首シンバンは東金寧里本郷堂のタンメンシンバンである徐順實氏 (女性) である[13]。タンメンシンバンとは村の本郷堂の巫儀を担当するシンバンのことである。徐氏は1981年にシンクッを行った文順實氏であり、済州クンクッの芸能保有者であった故李中春シンバンの弟子であった。徐氏は14才頃から体のあちこちが痛くなったが医者の治療も薬も効き目がなく、占い師に占ってもらったところ、「シンバンにならなければ直らない」といわれ、巫業に携わるようになったという[14]。今回のシンバンの中で最も若く51歳であったが、前述したように今までに4回のシンクッを行ったという。2010年、東京の韓国文化院で行われた「金秀男写真展」で写真家・金秀男氏の慰霊のクッの首シンバンを務めたのも徐氏であった。「漢拏日報」は、徐氏を“現在済州クンクッの唯一の伝承者である”と評している[15]。

梁昌宝氏 (男性 1935年生まれ) は78歳のベテランのシンバンである。翰林出身で日本時代の小学校を卒業し、6.25戦争 (日本では“朝鮮戦争”) に従軍した。25歳の頃から眼を患い、病院に行っても直らず、人に手を引かれてあちこちを歩きまわったという。巫業に携われば直るといわれてこの道に入ったら、半年後に回復したという経歴の持ち主である[16]。全国を回りクッを行なったが、50歳になったとき日本に渡り20年間クッを執行してきた[17]。「数多くのクッをしたのでタンゴル (顧客) たちの気の毒で無念な境遇に接し、これらの人々と共にたくさん泣き笑っ

てきた」と「漢拏日報」に語っている。梁氏は徐氏のシンクッ（1981年）では首シンバンを務め、金夫妻のシンクッ（1986年）にも参加した。それらのときと同じように今回も“悪心花折り”やコブンメンドチルチムなどを担当している。今回のクンクッを契機に、父母を早めに亡くした鄭氏の“養父”となり[18]、自分のメンド（巫具）を鄭氏へ譲った。メンドとはシンカル（神刀）・サンバン（算盤）・ヨリョン（鈴）であり、これらは巫具であるとともに、巫業の守護神であり、補助霊であり、巫祖であるといわれる。

他のシンバンは、康順善氏（男性65歳　松堂里タンメンシンバン）・姜大元氏（男性67歳　東福里タンメンシンバン）・呉春玉氏（女性59歳　シフンリ・ナサンリ・ソフンリのタンメンシンバン）、李承順氏（女性67歳　康順善夫人）、金チャニョク氏（女性80歳）のシンバンであり、ソンヨンミ氏（高福子シンバンの娘　39歳）がソミ役を務めた。決して若いとはいえないが、連日、早朝から夜遅くまで（遅いときは12時近くまで）クッを続けるシンバンたちのエネルギーは驚異的であった。首シンバンなどは一人で延々３時間近く唱え続けたことがあった。

康氏・姜氏・李氏・呉氏は、前述した韓国文化院の「金秀男写真展」で徐氏を首シンバンとして金秀男の死霊祭祀を行ったメンバーである。彼らがひとつのグループを結成しているのがわかる。前述したが、今回のシンクッの首シンバンを務める徐氏は梁氏の弟子であり（師弟）、姜氏はその梁氏の甥であり（親戚）、康氏と姜氏はきょうだい弟子であり、李氏は康氏の夫人である。クッはシンバン一人では行えない。シンバンは自分の担当する堂や請け負ったクッを行うに当たって仲間のシンバンたちに小巫や楽師の役を担当してもらう。姜氏の担当する東福里の新年クッ（堂クッ）や加波島のヨワンクッでは鄭氏の姿を見たが、日頃からクッをやる仲間なのであろう。今回のシンクッも日頃クッを共に行う仲間のシンバンたちによって行われていたことがわかる。

（３）クッに参加した人々：スタッフ・見学者・報道関係者

主なスタッフとしては、ＫＢＳのクルー、研究所のスタッフ、今回の写真記録担当の２名のカメラマン（済州道庁の職員）である。クッの最中、ＫＢＳと研究所の代表者たちは鄭氏と共に厄祓いを受ける儀礼に参加した。

見学者としてはクッおよび済州島の伝統文化の研究者（大学教授・大学院生・文化人など）と漢拏日報の金ミョンソン記者であった。クッの好きな老人や、民俗村の観光客がとおりがかりに見に来ることもあった。参加者の役割は、クッの最中に何回かインジョン（主に1000ウォン紙幣（当時約75円））をシンバンに渡すこと、ソウジェソリの場面で踊りに参加することであった。済州島ばかりでなく陸地からも朱剛玄氏・黄縷詩氏・李秀子氏をはじめ多くの巫俗の研究者が参加した。日本からは、済州島研究会のメンバーである金泰順・伊藤好英・古谷野昇・古谷野洋子（筆者）が参加した。筆者は李秀子氏と共に最後のトッチェをのぞいて全行程を見学した[19]。

３．シンクッの流れ

ここではシンクッの主な流れを報告する。今回は前述したように「再現記録行事」という特殊な状況であった。このような状況は現代における民俗文化の継承のあり方のひとつであると考え、その点にも留意をして報告したい。

（１）準備など

クッは日取りを撰ぶことから始まる。シンクッの日程は前述したように、2011年10月13日より28日までであった。クッは月をまたいではいけないので、逆算してこの日程を決めたという。なお、28日はクッ終了後のパーティーであり、実質的なクッは10月27日で終わっている。

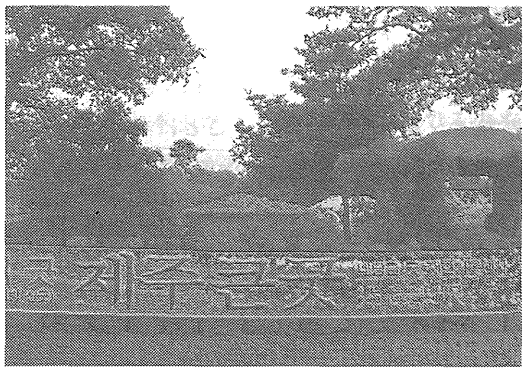
10月12日、朝からマバンドでクッの準備が行われた。クッの準備はすべてクッを行う場でシンバン自らの手によって行われる。会場設営（壁に神様の座す棚を作るなど）・キメ（部屋の周囲に飾られる切り紙など）作り・クンデ（神を招くよりしろとなる長竿）作り・供物を供えるなどの作業が手分けして行われた。本主となる鄭氏は裏の部屋で自分と亡くなった親族の来歴を墨で紙に綴っていた。この紙はシンクッを通して何度もシンパンたちによって読まれることになる。

済州島の神々にはそれぞれ位階がある。最も高位の神は玉皇大帝である。真中の部屋の四方の壁に作られた棚は各種の神々を迎える祭壇となる。これらの祭壇は玉皇大帝から三公神までの高位の神々の棚、あの世の神であるシワン（十王）の棚、門神・本郷神などの棚、死後３年を越えた死霊を祭る棚である。これらの神々を呼ぶため４つの棚を作るのがクンクッであり、これがクンクッを４タンクルクッ（四祭棚クッ）と呼ぶ理由である。４つの棚には供物（糸･白紙・ロウソク・水・布）が供えられキメが吊り下げられる。その左右に堂主房（タンジュバン、巫祖神を祀るところ）とクウンバン（大房か？）があり、やはり供物が供えられる。堂主房はシンバンの家で平素はメンド（巫具）などを祀っているところである。堂主房が基本祭壇となるが、主要な神々の個別儀礼になると、その神を招く祭壇を庭に別に設けて行う。しかし、最終的には神々は室内に招き入れられる。

準備が整ってから、研究所理事長の文武秉氏が研究者を各部屋に案内して、クッの会場の説明をした。このとき、見学者の写真及びビデオ撮影の禁止が言い渡された[20]。しかし後に休憩時間と石垣の外（屋敷の外）からの撮影は許可された[21]。

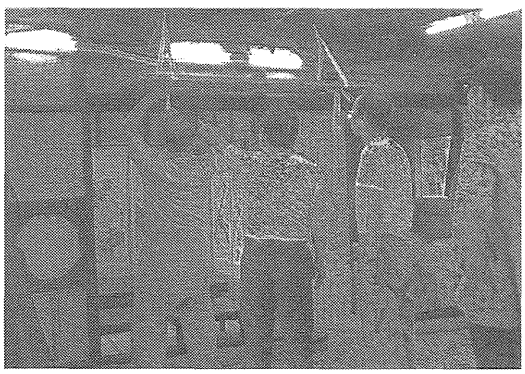
午後７時半から、キメコサ（キメ告祀）が行われた。部屋中の棚に白いキメがはりめぐらされ、家の中には清浄な雰囲気が漂う。梁シンバンが中央の部屋で庭に向かって坐り、後方に本主である鄭氏が控える。梁シンバンは杖鼓（チャンゴ）を叩きながら、「しきたりどおりキメをやりました」と祭場の準備が整ったことを神々に告げた。その後、庭の中央で輪になり全員でその日の供物をいただき、研究所所長朴キョンフン氏の司会で、シンバン・ＫＢＳメンバー・研究所所員・研究者・里長など筆者を含めて参加者全員が自己紹介を行った。

シンクッの風景①



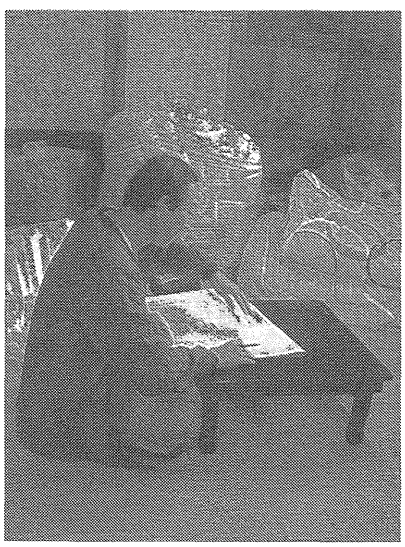
会場入口に張られた「済州クンクッ」の幕

シンバンたちを迎える鄭氏
（ＫＢＳのやらせである）



部屋の四方に神々の棚（タンクル）を吊る

会場（マバンド）、庭には藁が敷かれる



自分と祖先の来歴を書く鄭氏

堂主房の祭壇

（2）シンクッのおおまかな流れ

以下、シンクッのごく大まかな流れを記す。クッはまず会場に神を招く請神儀礼＜チョガムジェ＞から始まる。シンバンたちは時間をかけて何度も何度も神々や鄭氏の祖先霊（家族・親戚の霊）を招いた。すべての神々や祖先霊が招かれたら、次に個別に神々を招く。全ての神々を迎えたはずなのだが、主要な神々や本主の祖先霊はもう一度個別に招くことになっているからである。その後にシンクッ特有の儀礼であるサムシワンマジ（堂主マジともいう）が行われ、シンバンの巫祖神（サムシワン、堂主ともいわれる）が招かれ、シンバンの成巫儀礼が行われる。この日がシンクッのクライマックスともいえる日である。その後は、シンバンが怠惰な生活を送るが悔い改めるというコブンメンドチルチムや、サンゴンマジ（三公マジ）・サンシンノリ（山神ノリ）などの演劇的な巫儀が繰り広げられ、最終的に神々や祖先霊が送られる。玄はクンクッの構成を総合請神儀礼→個別儀礼→総合送神儀礼と記しているが（玄1985:271）、シンクッは個別儀礼に本主の成巫儀礼とコブンメンドチルチムが加わったものである。

しかし、シンクッの過程をシンバンの成巫儀礼という点に注目してみると、①祭主として神々と祖先霊を迎える、②シンバンとしての成巫儀礼を受けたのち、シンバンとしての試練と教訓を受ける、③神々と祖先霊を送る、に大きく分けられる。ここでは時系列の報告ではあるが、成巫儀礼という点（①～③）にも注目して報告する。

（3）シンクッの実際

それぞれの儀礼を担当するシンバンたちは各儀礼の開始前にまず本主に挨拶をする。本主が「お願いします」とこたえると、次に、他のシンバンたちに挨拶してから儀礼を始めた。このようなシンバンたちの態度からは、シンバンたちが本主のシンクッを祝い、本主の前で自分の技を披露するという姿勢が窺えた。

シンクッの撮影は基本的には儀礼ごとに行われ、その儀礼が終了すると撮影も終了した。撮影開始直前に開始時間と儀礼の名称（開始前に首シンバンが伝える）を書いたホワイトボードをＫＢＳの担当者が持ち、１・２・３・バンと手を叩いて合図をして撮影と儀礼が開始された。カチンコである。各儀礼はカチンコと共に始まるわけである。庭で行われた最初の儀礼では、ＫＢＳのディレクターと研究所所長から「クッの最中は中に入らない。携帯電話を切る。禁煙、撮影禁止」という注意事項が周囲の見学者に言い渡された。

ここでは主要な儀礼の名称は＜＞内に記すが、そこに含まれる個々の細かな儀礼等の名称、内容等は省略する。主要な儀礼やノリ・神の由来を語るポンプリ（本縁譚）などの内容は[22]、張籌根『韓国の民間信仰　資料編』、玄『済州島巫俗の研究』（pp.256 - 273）・野村『韓国民俗戯あそびと巫の世界へ』（pp.201 - 274）等の報告がすでにあるので参照していただきたい。

①祭主として神々と祖先の霊を迎える

第１日目（10月13日）＜チョガムジェ＞

早朝、城邑里の本郷堂であるアンシン堂に祈願に行く[23]。まずその集落の神にシンクッを行う挨拶をするわけである。その後、シンクッの会場となるマバンドの庭で（以下、庭とのみ記す）首シンバンと本主がクンデを地面に立てるのを見守る儀式が行われた。１万８千の巫俗の神々を迎える請神儀礼が始まり、シンバンは天地開闢・祭日・祭場について語り、さらにクッをする理由などを述べる。本主である鄭氏と家族等の来歴が語られ、さらにＫＢＳや研究所の援助を得て今日クンクッを開くまでの経過も語られた。鄭氏がシンバンになるまでの話が延々と続いたが、その内容はすでに述べたので省略する。

請神儀礼では神々を招くだけではない。首シンバンは亡くなった鄭氏の家族・親戚の霊に対しても、「今日からシンクッが始まりますからいらしてください」と招き、鄭氏の“養父”となる梁シンバンの亡くなった家族の霊も呼んだ。さらに、亡くなった有名なシンバンの名前を列挙しその霊も呼び、首シンバン自身のことも語った。首シンバンはハンカチで涙を拭き拭き霊に語り続け、本主も泣いていた。その後、厄祓いが行われ、神門を開く儀礼、楽器の神様に供物を捧げる儀礼などが続いた。

午後４時、門が全て開くと、鄭氏の母親の霊もやってきた（実際は首シンバンが語っている）。首シンバンは鄭氏に母親の言葉を泣きながら語り、鄭氏は泣きながら母親にこたえていた。

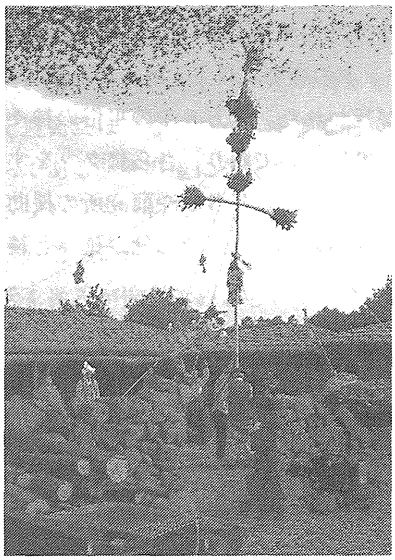
第２日目（10月14日）＜チョガムジェ＞

午前７時、神々が起床して顔を洗う儀礼が行われる。銅鑼を叩き、供えた酒も新しいものに変える。これは、毎朝行われる儀礼であり、この後にシンバンたちは食事を取る。この日も請神儀礼が続く。招きもれた神のないように再度神々を招き、さらに礼を尽して神々を迎え入れ、各部屋の出口に２枚ずつ五方旗を貼る。これは招いた神々を封じ込めるためである。その後、各神々、本主の祖先の霊に供物を献上する。さらに会場を清浄にするため厄祓いを行い、本主と研究所の文理事長と朴所長が並んで厄祓いを受けた。本来これは本主の家族などが並んで受けるべきものであるが、研究所の代表が鄭氏の家族代わりとなった（後にはＫＢＳのディレクターも並んだ）。

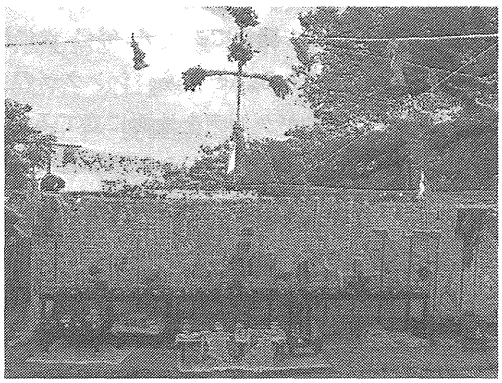
第３日目（10月15日）＜チョガムジェ＞

この日も請神儀礼が続く。神々に木綿の布を献上する＜ポセカムサン＞が行われた。梁シンバンが供物の木綿を両腕に巻きつけ、本主の犯した罪によってこうなったといい、罪をとくためにと周囲の参加者からインジョン（人情と書くが、お金のことである）を集めた[24]。集まったお金を数え、最後に梁シンバンの布が解けて、木綿献上が終わる。昼食後、首シンバンによるチョゴンポンプリ（巫祖神である初公の本縁譚）[25]、李シンバンによるイゴンポンプリ（西天の花畑を司る二公の本縁譚）[26]、康シンバンによるサンゴンポンプリ（前世を司る三公の本縁

シンクッの風景②

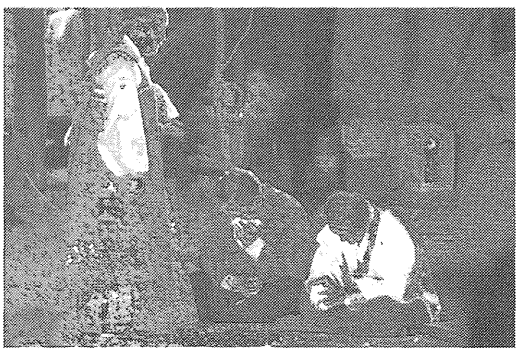


クンデを地面に立てる（13日）



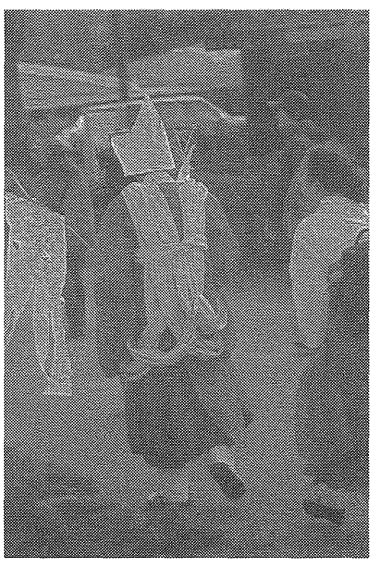
シワンマジの祭壇（20日）

シワンマジ：祖先霊を迎える兄弟（20日）



シワンマジ：祖先霊の口寄せに泣く（20日）

御印打印の後で供物を捧げる本主（22日）



初めてのクッをやりに行く（22日）

譚）[27]が杖鼓を叩きながら唱えられ、これらの神々が招かれる。

第４日目（10月16日）＜プルトマジ（仏道婆さん迎え）＞

午前中にセギョンポンプリ（農神の本縁譚）が杖鼓を叩きながら唱えられる[28]。以上で全ての神々を呼んだことになるが、今度は主要な神を個別に再び招かなければならない。午後から、庭の中央に供物を準備して祭壇を作り、“仏道婆さん”（プルトハルマン）を呼ぶ＜プルトマジ＞が行われる。“仏道婆さん”とは産神であり、子供たちの健やかな成長を願う儀礼である。首シンバンの涙を流しながらの語りで“仏道婆さん”が招かれ、供物が勧められる。本主は堂主房のほうに供物を捧げるしぐさをし、焼紙を捧げる（神々がやって来たときには焼紙が行われる）。次に子供の死霊を司るクサンシンハルマンを迎えて、供物（オシメや服）を捧げる。サマニポンプリが語られ[29]、本主をゴザで巻き、鶏でゴザやその周囲を叩き本主の厄祓いが行われた[30]。首シンバンは白く長い布（神のやって来る橋を意味する）を振り回して“仏道婆さん”を迎える。さらにクサンシンハルマンの花を折り災いを避ける“悪心花折り”がシンバンたちの掛け合いで愉快に行われる。「バイクの事故」と一人のシンバンが言うと、その悪心花を持っているシンバンがその花を折るという形である。その後、堂主房まで神のやって来る道ごしらえが行われ、梁シンバンが娘になり化粧をする様子が面白おかしく演じられる。この演技は初公ポンプリに基づいていて、この娘は僧に乞粒を与えて妊娠し初公神（シンバンの巫祖神となった３兄弟）の母親となる。

第５日目（10月17日）＜チョイゴンマジ（初公・二公迎え）＞

朝食後、シンバンたちは庭に供物を供え、クンデから堂主房の柱まで木綿の布を繋ぎ、初公神・二公神を迎える＜チョイゴンマジ＞を始まった。神門が開き、歌と踊りで神を楽しませるソクサルリムで見学者や調理の女性たちが踊り、最後に神に供物が捧げられた。夕食後、梁シンバンによる堂主道の掃除が行なわれた。梁シンバンは昨日と同じように“悪心花折り”をしてから、椿の入った容器を両手に持って本主に渡した。これは“生命の花”を意味する。しばらくの間、シンバンたちは椿の枝を両手に持ってお互いに叩きあうという遊びをした。次に初公ポンプリが再び唱えられ、昨夜と同じように梁シンバンが娘になり化粧をする様子が演じられた。そのあと堂主が自分の来歴をうたう＜コンシップリ＞があり、木綿の白布（神のやってくる橋を意味する）を外にいる首シンバンと室内にいる本主が引き合った。最終的に布は室内に引き入れられるが、これは神が室内に入ったことを意味するという。この夜は最後に、シンバンたちと参加者全員が供物をいただいた。

第６日目（10月18日）＜チョイゴンマジ＞＜ポニャンノリ＞など

朝、初公神と二公神を室内に招き入れる儀礼が行われた。次に＜ポニャンマジ＞（本郷神迎え）、＜トサンポニャンノリ＞が行われる。李シンバンが人形を背負って現れ、赤ん坊のオシメ

を替えたり、言葉を教えたりしてかいがいしく世話をする場面を演じる。これは兔山里上堂本縁譚に基づいたものである[31]。夜、姜シンバンにより龍が腹を上にして部屋の中に入っていくノリが行われた。これは運を引き入れるノリだという。さらに、家に富貴をもたらすチルソンポンプリ（七星本縁譚）が語られ[32]、神を歌と踊りで楽しませるソクサルリムで終わった。

第７日目（10月19日）＜シワンマジ（十王迎え）＞[33]

＜シワンマジ＞はあの世の神シワンを招く儀礼であるが、実際には、あの世の使者である差使を迎えてから本主の祖先霊を招き、それからシワンを招くという２段階からなる。朝食後、シワンマジの準備が時間をかけて行われる。庭のクンデの下にシワンを招く祭壇（十王棚）を設ける。クンデの下には地獄の神々の名前が書かれた紙が張り巡らされ、祭壇には供物が供えられる。

首シンバンの長い語りのあと昼食を挟んで、康シンバンの厄祓い・神門開きが行われる。次に、＜ポニャンシンチョンゲ＞（本郷神シンチョンゲ）で本郷神を迎える。首シンバンが本郷神を迎えるため、激しい音楽とともに室内と外を何度も往復する。首シンバンが室内のときは室内の楽師によって音楽が演奏され、外のときは外の楽師によって演奏される。首シンバンは布を肩に結び、腕にも結び荒々しいいでたちになり、本郷神を招き、酒瓶の包みを持ち、地面に叩きつけ、外に捨てに行く。これは本郷神と共についてきた軍卒に与えられるものである。

本郷神がやってきたら再び＜トサンポニャンノリ＞が行われる。赤ん坊をおんぶした呉シンバンが現れ、赤ん坊のオシメを替えたり、言葉を教えたりかいがいしく赤ん坊の世話をする。終了後、「チョッター」の合の手で歌がうたわれ、本主が倒れるまで踊ってから祭壇の前で供物を捧げた。午後９時35分から＜デミョンワンチャサポン＞が行われ、康シンバンが背中にチャクベキ（あの世の使者の印）をつけてあの世の差使となり語り続けた。

第８日目（10月20日）＜シワンマジ＞

この日は、あの世から鄭氏の祖先霊が招かれる日である。やってきた祖先霊は、慰撫され、供物が献上され、あの世に送り帰される。シンバンによって祖先霊の言葉が本主に伝えられるので、さかんに口寄せが行われる。この日は本主の弟夫婦もやってきて、本主とともに祖先霊を迎え送った。

午前9時、神を呼び、甑餅を二人のシンバンが投げあい神饌として神に献上する。神饌献上後、割り竹をアーチ型に地面にたて（５本ずつ２列）、鄭氏の祖先霊のやってくる地獄の門を作る。道の障害物を取り除く所作が行われ、本主の祖先霊の名前を呼び、それぞれに衣服を捧げる。シンバンは「アボジ」、「オモニ」と泣きながら呼んで、神門を開く。ついに神門が開き祖先霊がやって来た。まず、祖父の霊がやってきて、「よく聞きなさい」と兄弟に語りかける。首シンバンは泣きながら、祖父の言葉を本主に語りかけ、本主たちも泣きながら聞いていた。次に大伯父が呼ばれ、さらに父と二人の母と姉の霊が呼ばれた。そのたびに兄弟は供物を捧げた。シンバンは障害物をどけ、道を掃除して、木綿の白布を門の下に敷く。シワンの橋である。割り

竹で作った地獄の門にはそれぞれ白い紙と白い布が掛けられる。シンバンは祖先に捧げる衣服の束を持ってポンプリを唱え続ける。本主兄弟は門の前に坐り、供物を捧げながら、割り竹で作った地獄の門を次々と開けていく（実際にはシンバンたちがとりさる）。門が開くと、祖先霊は「アイゴー」といいながら帰っていく（実際には首シンバンが泣きながら語る）。兄弟は「アボジ」、「オモニ」と呼びかけ、泣きながら祖先の霊を送った。その後、再び道掃除が行われ、シンバンによって衣服に書かれた文字が読み上げられる。これは本主の祖先霊のそれぞれの名前であり、これらの衣服は祖先霊に捧げられたものである。

第９日目（21日）＜サンシンノリ＞＜サムシワンマジ[34]＞

午前中、鶏を殺して厄祓いをした後、<サンシンノリ>（山神ノリ）が行われた。これは、二人の猟師が猟に出かけ、鶏（本当は豚か鹿だという）をしとめて、本主の家に行き、鶏と酒で宴会を開くという内容である。この鶏と酒を頂くと健康になるといわれていて、インジョンを払って宴会に参加する見学者もいた。午後はチャサポンプリ（差使本縁譚）が唱えられ[35]、本主が自らを語るコンシップリ、シワンのやって来る道の掃除があり、シワン招きが行われた。ここまでが＜シワンマジ＞である。

夜の７時から、＜サムシワンマジ＞が始まった。＜ポニャンノリ＞が行われ、さらに、歌をうたい踊って神と共に楽しむソクサルリムがあった。

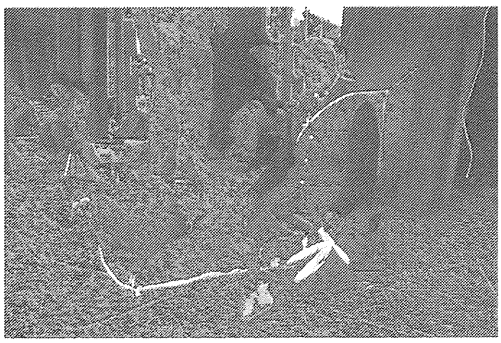
②サムシワンを迎えシンバンとしての成巫儀礼を受ける

第10日目（10月22日）＜サムシワンマジ＞

この日は本主にとって最も感動的な日である。まず、神名が延々と唱えられ、請神の儀礼が行われる。厄祓いが行われ、神門が開き、神が招かれる。この日も本主は弟と共にサムシワンのやって来る門の前に坐った。首シンバンのもとで地面にアーチ型に立てられた割り竹が開かれていき地獄の門が開く。シンバンの祖霊神がやってくると供物を捧げもてなした。本主は首シンバンから薬飯薬酒をいただき、背中に印を押してもらう（御印打印）。御印打印のあと、首シンバンが、「今までは許可なく巫業をしてきたけれど、これからは本当のシンバンになるんですよ。これからはクンシンバンとして、真面目にクッをやりなさい。お金が足りなくてもみんなで分け合い、クッの途中からどっかに行ってしまったりしてだめですよ」とユーモアたっぷりにいい、本主も「ありがとうございます。これからはそうします」と誓う。二人は祭壇の前で供物を捧げるが、これを役価認定という。新シンバンの誕生である。本主はサムシワンの橋（白い布）を両腕・背中に幾重にも巻きつけたいでたちである。

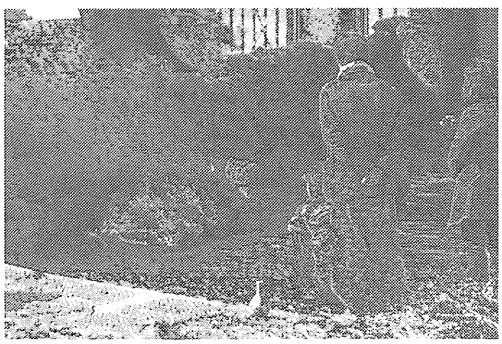
新シンバンとなった本主はそのいでたちで仲間のシンバンたちを連れて初めてのクッをやりに出かける。民俗村内の家（すでに借りて準備してある）の中で簡単なクッを行って帰宅する。帰宅してから堂主房に皆揃って「３千万ウォン、４千万ウォン」などと大きな金額をいいながら、新シンバンが公平にお金の分配をする[36]。お金の分配の後、ゆで卵を食べ酒を飲むが、これ

シンクッの風景③

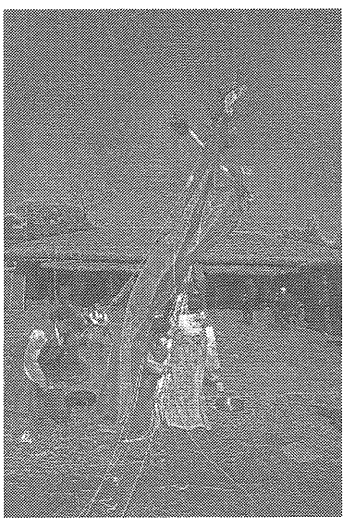


サンシンノリの出番を待つ（21日）

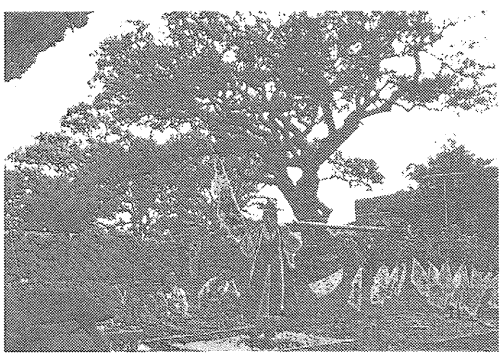
本主が自らを語るコンシップリ（22日）



祖先に捧げる服を燃やす（26日）



クンデを倒す（27日）



ヨワンマジ（27日）

撮影開始の合図

はクッで貰ったものを共に食しているのであろう。

分配の後、ＫＢＳが本主にインタビューを行なった。新シンバンの誕生を祝って参加者を交えて何回も記念撮影が行われ、シンバンたちも嬉しそうに記念撮影に加わった。首シンバンにはほっとした表情が伺えた。さらに、神饌献上の甑餅投げを行い、成巫儀礼を終えた本主が涙声で自らの来歴を語る＜コンシップリ＞があった。その後、道掃除をして、初公ポンプリを唱えながら笹竹の門が開かれた。午後11時から、白い布（橋を意味する）を外の首シンバンと室内の本主が引き合い、室内に神を引き入れる儀礼が行われた。

第11回目（10月23日）＜サムシワンマジ＞＜セギョンノリ＞

朝、＜サムシワンメヲドム＞（サムシワン招き）が行われるが、これは本主が昨日と同じいでたち（巫祖神が渡る橋となる白い布を身に巻きつける）で大きな旗を持って、室内と外の祭壇を何回も往復するものである[37]。その後、巫具（メンド）をなくしたシンバンが巫具を見つけて再生する＜コブンメンドチルチム＞を梁シンバンが演じる。巫具をタンクル（棚）の中に隠すが、怠惰な生活を送るシンバンにはその行方がわからない。最終的には神々の力を借りて巫具を取り戻すのだが、その過程を面白おかしく演じる。ここまでが、＜サムシワンマジ＞の範疇である。午後３時からシンバンたちによる寸劇＜セギョンノリ＞が行われた。生まれた子供は勉強はできないが粟を作らせたら豊作になったという物語であり、種蒔き・除草・刈り入れ・脱穀などの農作業がシンバンたちによって延々と演じられる。最後に収穫物を部屋に引きいれるが、これは財運を引き入れたという意味だという。

③神々・祖先の霊・巫祖霊を送る

第12日目（10月24日）＜マルノリ＞＜サンゴンマジ＞

梁シンバンと姜シンバンの＜マルノリ＞がある。馬の数を数え、馬を船に乗せ、馬を売りに行く話である。二人は「新幹線に乗って新大阪へ行き、新大阪から梅田へ行き」などと延々と語った。これは済州島の方言で行われる言葉のあそびであり、帰る神々に「馬に乗って帰ってください」という意味で行われるという。

サンゴンポンプリに基づいた＜サンゴンマジ＞という盲人夫婦の物語が行われる[38]。末娘のおかげで金持ちになった夫婦がその末娘を追い出したため没落し、盲目の乞食になり、末娘の開いた乞食の供宴に行き親子再会となり、眼も見えるようになったという内容である。

第13日目（10月25日）諸神への祈願・神々を送る、または送る準備

朝、城邑里の女性たちは背中に供物を背負い、シンバンと共に再びアンシン堂に行き、供物を捧げ祈願をした。今朝のアンシン堂の祈りは村の人々の頼みで行ったという。シンバンや参加者にものんびりした雰囲気が漂う。明日はすべての神々が帰るのでその準備である。参加者全員の厄祓いの後、各所祈願でカマド神の祓い（テントの炊事場のガス）などが行われた。午

前中は高位の神々を送る儀礼が行われ、中央の部屋の四方の棚を覆っていた白いキメのほとんどをはずした。午後に上の棚に坐っている高位の神々が牛に乗って帰るという。厄祓いとして鶏（牛の役目をする）を殺したが、その時に高位の神々が帰っていったという。門前では本郷神など下位の神々を送る儀礼が行われた。

第14日目（10月26日）本主の家族の霊を送る・すべての神々を送る＜クンデチウム＞

全ての神々を送る日である。シワンマジで使用した鄭氏の祖霊に捧げた衣類を焼き、本主の祖先の霊を送った。焼却場に酒を撒いて「ナムアミダブル」と唱えながらすべての布を燃やした。その後、シンバンたち全員が楽器を演奏し、すべての神名を歌い、神々を送った。最後に首シンバンが旗を両手に持って「ありがとうございました」と礼をいう。午後からクンデとその横の２本の竿を倒す＜クンデチウム＞が行われた。クンデの前に膳を置き祈願してから、旗をはずし、銅鑼の音とともにクンデを倒した。旗や吹き流しをはずしてクンデと一緒に室内に引きずって行く。旗と吹き流しは堂主房へ置き、柱は軒下にかけておく。クンデの立っていた場所には塩を撒いてから鍋の蓋で穴を塞いだ。その後、首シンバンは激しい音楽とともに室内と庭の中央を往復し、何度も旋回した。これは、シンバンの神々に外に行くように、帰るようにと告げているのだという。

第15日目（10月27日）＜ヨワンマジ＞＜ヨンガムノリ＞

午前中、まだ帰らないで残っている神々を送る。本来はクッが終わってから数日後に行う儀礼である。午後から、龍王神を招く＜ヨワンマジ＞が行われた[38]。龍王神は海を司る神であり、＜ヨワンマジ＞は豊漁を祈ったり、海で溺れ死んだ人々を慰撫してあの世に送る儀礼である。夜に仮面劇＜ヨンガムノリ＞が行われた。海女に取り付いた厄神であるヨンガム神をその兄たちに連れ帰ってもらう内容であり、厄祓いの意味がある。

最後の日（10月28日）＜トッチェ＞

この日は、豚を解体して供えて、村の人と共にトッチェ（供物を共食）をする。この日は村人へのサービスの意味で、マルノリ、サンシンノリ、ベパンソンを行った。ベパンソンとは小さな藁舟に供物を載せて海に流すものであり、城邑里には海がないので表善里まで行って船を流したという。

以上、大まかではあるが、2011年度のシンクッの流れを報告した。詳細な内容については十分な資料が揃ってから行うこととしたい。

4．まとめとして

以上、2011年に行われたシンクッについて報告したわけであるが、まとめとして今回のシンク

ッを通してみた済州島の巫俗世界について、約30年間におけるその変容に留意しつつ述べ本報告を終わりたい。

（1）シンクッの力

筆者にとって、シンクッを見続けた15日間は済州島の巫俗世界にどっぷりと浸れた至福の時間だった。シンクッは豊かな済州島の巫俗の世界を目の前に見せてくれた。毎日朝早くから夜遅くまで15日間繰り広げられたさまざまな儀礼の連続には圧倒された。本主とシンバンが神のやって来る布を延々と引き合うシーンでは涙が流れた。このとき、筆者は巫俗の世界に取り込まれていたといえよう。確かにシンクッは人々を巫俗の世界に取り込んでしまう力を持っている。巫俗の世界にとりこまれたのは筆者だけではない。筆者と共に最後までシンクッを見学した李秀子氏も、「最初から全てがとても興味深かった。済州島には驚くべき巫俗の文化が残っている」とその興奮を筆者に語った。本主の弟は巫俗の世界とは縁のないような雰囲気の人物だったが、いつしか彼もシンクッの世界に取り込まれ、シワンマジでは鄭氏と共に祖先霊の言葉に涙を流し、兄弟二人で祖先霊に供物を捧げ、あの世に送っていた。クッが終わりに近づくと、会場となった城邑里の女性たちは今まで行っていなかった堂の祭祀をシンバンに頼んだ。彼女たちもテントで食事の支度をしながらいつの間にかシンクッの世界に取り込まれてしまったようだ。

シンクッの世界は宗教を問わない。全てを取り込んでしまうおおらかな世界である。鄭氏の家族・親戚はキリスト教徒だったが、シワンマジで呼ばれた祖先霊はシンバンの口を借りて鄭氏に語りかけた。巫俗の世界では、シンバンが礼を尽して呼べばたとえ他の宗教の信者（祖先霊）でもやってくるという信念があるのであろう。

今回のシンクッの場は「再現記録行事」として設定されたものであった。しかし、ＫＢＳと研究所の代表者は「再現記録行事」のスタッフとしてだけではなく、儀礼の中でシンクッの関係者としての役割も課された。厄祓いのときは鄭氏とともに座り厄祓いを受け、ＫＢＳのディレクターがシンバンから占いの結果である神託を聞くこともあった。それは、「上手に撮影して欲しい」という神託であった。このように、シンクッは「再現記録行事」の関係者もある意味ではクッの中に取り込んでいた。

鄭氏がはじめてのクッを終えて、儲けの分配をしたあと、会場は祝賀ムードに包まれた。「再現記録行事」は一時、祝賀記録行事と化し、参加者全員で記念撮影があいついだ。カメラのクルーに取囲まれて、カチンコで始まる儀礼であったが、シンクッは撮影現場としての不自然さも自然のことのように感じさせるほど大きな力を持っていた。

（2）シンクッの場

シンクッの場はさまざまな意味を持っている。例えば、シンクッの場はシンバンたちの社交の場ともなる。シンバンたちが鄭氏のシンクッを祝って会場を訪問するからである。鄭氏と親しい高福子氏がチマチョゴリの正装でやって来たのを、シンバンたちが喜んで迎える場面が見

られた。高氏はしばらく楽器の演奏を手伝って帰って行った。さらに、ある日、やはりある男性シンバンがやってきて挨拶し、楽器の演奏を手伝っていった。これらを見ると、シンクッの場は新シンバンの誕生を祝う社交の場であり、シンバン同士の結束を確認する場ともいえる。しかし、本来、シンクッの場はシンバンだけの社交の場ではなく、本主の家族や村の人々の集まる場でもあったはずである。金秀男の撮影した徐氏のシンクッでは徐氏の幼いきょうだいや村の人々がじつに楽しそうに写っている。

抽象的な意味でシンクッの場とはシンバンの系譜の確認の場でもある。シンバンの系譜の確認とは、初公・二公・高典籍の娘・柳氏夫人等を巫祖神として、歴代のシンバンたちがそれに続き、自分もその末裔であるという確認である。シンバンの巫祖神を迎える儀礼（初二公マジ）や、巫祖神の本縁譚を語ることによって、自分たちがこれらの巫祖神に繋がる神の子であると確認するのである。本主は自らの来歴を何度もコンシップリの中で述べるが、そのとき初めてクッを行った柳氏夫人（シンバンの巫祖神のひとり）から続く歴代のシンバンたちの名を挙げる。本主をはじめシンクッの場にいるシンバンたちは、このような儀礼の中で自分たちが済州島の巫祖神と歴代のシンバンたちに繋がるものであると再確認するのである。

また、シンクッの場は本主が今までの自分の人生を振り返る場でもある[40]。鄭氏はシワンマジの薬飯薬酒の時の感動を、「30年前、大学時代に演劇をやっていた頃のことや、シンバンの仕事をやってきた17年間の出来事がパノラマのように甦った」と筆者に語った[41]。鄭氏の「養親」となった梁シンバンは自分のメンド（巫具）を鄭氏に譲った。梁シンバンにとってはメンドを譲るという行為はもう巫業をやめるという意味でもある。梁氏にそのことを尋ねたら、「もう年だからメンドは譲った」というが、やはり「さみしい」とのことだった。梁氏は梁氏でやはり自分の巫業に携わってきた過去を振り返ったのであろう。このように、シンクッの場はシンバンが自分の人生を振り返る場でもある。

かつて巫業に携わる人々は賤民視されていた。シンバンという職業を選択した人々の人生は決して安易な人生ではなかった。「今、52歳だが人生の一区切りという気持ちだ。17年間、シンバンの仕事をしてきたが、本当のシンバンになったという気持ちだ」と鄭氏は筆者に語ったが、本主が人間的にも新しく生まれ変わるのがシンクッの場なのである。自分の人生を省みることを通して、タンゴルたちと共にたくさん泣き笑うことができる本当の意味でのクンシンバンになっていくのであろう。

（3）シンクッの法則

何年かクッを見ているうちに、クッには一般的に次のような法則があるのがみえてくる。神々を呼ぶときには位階順に呼ぶ（玉皇大帝が最高位の神である）、主要な神々は個別に呼ぶが、やはり位階順に呼ぶ（仏道婆さん・初二公・本郷神・セギョン神・龍王神などの順である）という法則である。神々を個別に呼ぶときは道を作り、さまざまな道掃除をして、橋をかけて呼ぶなどの約束事もある。さらに送神の前にノリ（あそび）が挿入されることがあるが、これに

もその行われる意味がある。しかし、済州島のシンクッは14日間（今回は15日間）連続して行われる長大なクッであり、シンクッ独自の法則があると考えられる。

シンクッの中では、どうして、この儀礼にこの儀礼がはいってくるのか、この神々の本縁譚が歌われるのか不明な部分が多い。本稿ではできるだけわかりやすいようにとシンクッの流れを記述したつもりだが、それでもわからないところが多々あるはずである。例えば、第７日目の＜シワンマジ＞では、本郷神を迎え、兎山ポニャンノリを行うなどの過程を経てはじめて地獄の差使が現れるのだ。このような例はシンクッの中にたびたび見うけられる。また、なぜこのような場面がとりたてて演じられるのかわからない箇所がいくつもある。例えば、なぜ初公ポンプリで娘の化粧する姿がジェスチャーで面白く演じられるのか、なぜ兎山ポニャンノリで赤ん坊の世話をする様子が日本のナツメロまで歌われて面白く演じられるのか。これらは決してアドリブではない（野村も報告している）。たぶん、その理由は一概に口で説明できるものではないようである。シンクッの場で連続して演じることによってシンバン自身が会得していくのであろう。そして、その根底にあるのが済州島巫俗の世界観なのであろう（これは、さらに詳しい資料を得てから改めて考察したい）。シンクッを学ぶということは単にシンクッの法則を学ぶのではなく、済州島の巫俗の世界観を学ぶことなのである。

（４）シンクッの伝承と現代社会

今回のシンクッは報道機関や研究所の協力で行えたシンクッであった。長い空白の期間はあったがシンクッは行われた。これは、若いうちから４回もシンクッを経験している徐氏が首シンバンを務めたこと、さらに経験豊富な梁氏の存在に因るところが大きい。シンバンが一生に３回はシンクッをやるという済州島の巫俗の世界にある不文律が、シンクッの保存と継承の機能を備えていたといえる。しかし、シンクッができる李中春氏などのベテランのシンバンたちは相次いで亡くなり、長い間正式なシンクッもなかったためシンクッを行えるシンバンはほとんど育っていない。

70年代初頭に始まったセマウル運動の影響は済州島にも及び、迷信打破運動によって堂は壊され、クッをしたシンバンたちは警察に呼ばれた。しかし、前述した梁貞順氏・高福子氏の事例からは、それでもシンクッが続けられてきたことがわかる。迷信打破運動のあと、クッは民俗文化、無形文化財と見做されるようになった。韓国は大きな経済発展を遂げ、経済状況も大きく変わった。しかし、80年代の半ばくらいから現在に至るまで、クンクッもクンクッ形式のシンクッも行われていない[42]。前述の梁氏・高氏・徐氏・金夫妻のシンクッは60年代から80年代までに行われてきたものである。なぜ、４半世紀、正式なシンクッは行われなかったのだろうか。

時代の流れがクンクッの伝承を困難にしているともいえよう。現在、クンクッを行うには多額の費用が必要とされる。クッを行う“顧客”が減ったため、シンバンの収入は減った。さらに時代の趨勢を反映してか、死者を送る儀礼＜クイヤンプリ＞を行う家も近年では少なくなった。人々の意識が変わり巫俗儀礼を行うことが少なくなったのである。人々は日数のかかるク

ッを敬遠し、クッの規模も小さくなる傾向であり、これもシンバンの収入減の理由の一つとなっている。1986年の金允洙・李貞子本主夫妻のシンクッのときには、700～800万ウォンほどかかったらしいが（野村1987:199)、今回の本主である鄭氏によると、現在、シンクッを行なうには3000～4000万ウォンかかるとのことであった。さらに、シンバン自身も昔のように人生の中でシンクッを優先して考えられない時代となっている。このように巫俗の世界も時代の流れに大きく左右されている。今回は報道機関や研究所のおかげで行えたシンクッであった。

このような“保存記録”という形が、現在の民俗文化の継承方法の一つであるのは否定できない事実である。しかし、シンバン社会でもシンクッの伝承の重要性には気付いている。シンクッを共に行ったシンバンたちはシンクッを継承していく伝承母体であるといえる。後に、このときのシンクッのメンバーで「シンクッ保存会」を結成したと聞く。はたして今後どのような活動がなされるのか注目したい。

クッの継承についてだけではなく、シンバン社会自体が時代の流れと共にあるということも忘れてはならない。鄭氏のように大学で学んだ経歴のあるシンバンが現れたということは時代の流れであり、シンバンの社会自体も大きく変化しているのがわかる。今回の報告から政治の世界がシンバン社会にも大きな影響を与えていたことをみてきた。しかし、もともと“人々の気の毒で無念な実情に接し”人々の恨を解くのがシンバンの役目であった。シンバン社会は常に時代の流れと共にあったのである。

以上、シンクッを通してみた済州島の巫俗世界と約30年間におけるその変容について気ずいたことを述べた。シンクッは神々と人間とによって作られた豊かな巫俗儀礼である。筆者はその一握りの側面を報告したに過ぎない。

＜附記＞

ＫＢＳは年末から新年にかけて何回かシンクッについて放送した。さらに、ＫＢＳは今回のシンクッの写真集とビデオを製作・販売の予定だという。また、いずれ済州伝統文化研究所からの報告及び研究書が発行されると考えられる。

＜謝意＞

シンクッの見学を許可してくださったＫＢＳ、済州伝統文化研究所及びシンバンの皆様に感謝します。シンバンの皆様には大変親切にしていただいたが、特に姜大元氏にはお世話になった。ＫＢＳ及び済州伝統文化研究所のスタッフの方々、共にシンクッを見学した韓国の研究者たちにも感謝したい。特に研究者の安希敏氏にはお世話になった。また、共に見学した「済州島研究会」の金泰順・伊藤好英・古谷野昇の各氏にも感謝する。古谷野昇は厳しい条件を守りながら多くの写真資料を残してくれた。本稿のシワンマジ以降の写真は古谷野昇の撮影ある。

参考文献

・日本語

金泰順　2010「新陽里「潜女（チャムス）クッ」と青龍の誕生」『済州島研究』２号 済州島研究会

玄容駿　1985『済州島巫俗の研究』第一書房

済州島研究会　2009「済州島のヨンドンクッ」『済州島研究』創刊号　済州島研究会

＊本稿の訂正加筆版が『比較民俗研究23』（2010年）に収録されている。

徐淵昊　2009　伊藤好英・村上祥子訳『韓国演劇史―伝統と現代―』朝日出版社

張籌根　1973『韓国の民間信仰　資料編』金花舎

野村伸一　1987『韓国の民俗戯　あそびと巫の世界へ』平凡社

野村伸一　1999「済州島のクッの芸能性」『仮面と巫俗の研究』第一書房　pp.203-343

・韓国語

金ヨンソン　2011「済州島シンクッは私たちが守る」（「漢拏日報」10．22）

玄容駿　1989「死と再生、そして憑神体験　済州島シンクッの構成と意味」『済州島　シンクッ』（「韓国のクッ」12巻）悦話堂

文武秉　2011「済州島＜クンクッ＞の慣行」『済州クンクッ』ＫＢＳ済州島放送総局

ヤンミキョン　2009『カルソンタリを渡る　キメチジャン』済州特別自治島

・事典

韓国史事典編纂会･金容権編著　2006『朝鮮韓国近現代史事典』（第２版）日本評論社

・インターネット資料

http://www.flet.keio.ac.jp/～shnomura/shinku

註

[1]　立春クッ、堂クッ、ヨンドンクッ、ヨワンクッ、チャムスクッ、ペクチュンなどについては、『済州島研究』（創刊号～３号）に筆者を含め会員による調査報告がある。これらのクッを見学してきたことが今回のシンクッを理解するうえで大変役に立った。

[2]　本稿ではシンクッについては主に文武秉「済州島＜クンクッ＞の慣行」（『済州シンクッ』）を参照した。

[3]　「済州島研究会」の2008年の調査における下貴二の故姜宗圭シンバン（1921年生まれ）によると、近年はクンクッをやる人は少なくなったが氏の若い頃は年に４～５回くらいはクンクッを行ったという。

[4]　現在はシンクッをしなくても独立したシンバンとして巫業をしているものも多いが、40～50年前までは、このクッをしないとシンバンとして認められず、巫覡団体であった神房庁に登録もできなかったという。もしシンクッをしないものが巫儀をしたことがばれると、神房庁に呼ばれて厳罰を受けたという（玄1985：109)。現在、神房庁はない。

[5] 「済州島研究会」で2008年に梁氏宅を訪問し行ったインタビューによる。梁氏は新陽里のハロサンダンのタンメンシンバンである。海女であったが、原因不明の病気になり、「シンバンになって神の飯を食べれば病気が治る」といわれてシンバンになったという。

[6] 同書に収録されている玄「死と再生、そして憑神体験　済州島シンクッの構成と意味」は、玄『済州島巫俗の研究』(1985年) の第２章の「２．成巫儀礼―シンクッ」に収録されたものであり、正確には、「２．成巫儀礼―シンクッ」に、同書の「シンクッの順序」(玄1985:261－267) を加えたものである。また、この論文は『済州島巫俗とクッ周辺』(2002年) にも「済州島のシンクッ」として収録されている。

[7] 安仕仁シンバンはすでに故人となり、李中春シンバンは去年亡くなった。両者とも熟練した名シンバンであったという。

[8] 通りがかりの観光客が銅鑼の音に惹かれて会場内に入ってくることもあった。ＫＢＳは見学は許可したが撮影は禁止した。

[9] 梁昌宝シンバンは「こんな職業（巫業のこと）だれもやりたくないよ」とシンクッの間中何回も筆者に語った。

[10] 徐淵昊『韓国演劇史―伝統と現代―』の「神話劇とクッ劇」(pp.298- 324) 参照。「巫堂クッの様式を現代化させて、再創造した演劇を「クッ演劇」といい、略して「クッ劇」と呼ぶこともある」と記されている（徐2009：299 - 300)。

[11] 何回か鄭氏が自分の過去を語るコンシップリの内容と鄭氏の友人の話、鄭氏が筆者に語ったことを総合した。

[12] 『朝鮮韓国近現代史事典』による。

[13] 基本的にシンクッは日頃クッを共に行う仲間のシンバンと共に、その中でシンクッの経験のあるクンシンバンを首シンバンとして行われるものと考えられる。しかし、首シンバンにはシンクッを何回か経験したシンバンが望ましい。鄭氏の師はチルモリ堂の金允洙氏であり、本来ならばシンクッの首シンバンは金氏に頼むのだが、シンクッの経験が豊富だという理由もあって徐氏を首シンバンとしたのであろう。

[14] 『済州島巫俗の研究』p112による。

[15] 徐氏は「シンクッを原形どおりに後世のシンバンたちに譲ることは済州の土俗信仰文化を保存する仕事であると考えている」と「漢拏日報」に語った。

[16] この経過については『カルソンタリを渡る　キメチジャン』(2009) の梁氏の経歴に詳しく書かれている。梁シンバンはこの本に収録されている全キメを製作した。

[17] 日本語の上手な梁氏は筆者を見たときから、「わからないことがあったら何でも私に聞きなさい」と声をかけてくれた。「野村のときもいろいろと説明してやった」という。文武秉も野村について語ったが、野村伸一の済州島のシンクッ調査は今では伝承となっている。

[18] シンバンのメンドを継承する「養子」は同姓同本の親族でなくてもかまわない。他姓・男女に関係なく、メンドを引き受けて祀り、巫業を継承する。メンドを引き受けた「養子」は巫儀

執行の折ごとに、または神話上の巫祖の祭日に「養父母」を祀りもてなす、宗教的養子とでもいえるものである（玄1985:pp.92 - 93）。

[19] 宿泊施設は民俗村内を研究所で借りてあったが部屋数が足りなかった。そのため、筆者は車で約15分離れた表善里に宿泊し、毎朝、会場まで通った。

[20] 「クッを目で見て、耳で聞いて、心で感じてほしい」という文武秉氏の言葉があったことを書き添える。

[21] 本報告書に掲載した写真はそのような状況下で撮られたものである。

[22] ポンプリとは「神々の本源と来歴の解釈、説明」であるという（玄1985:286）。

[23] アンシン堂の神はパンチョンハルモニであり、試験の神様である。

[24] 筆者の出した紙幣は韓国紙幣であったが、梁シンバンが日本のお金を貰ったと喜び、回りのシンバンが「見せて」「見せて」とさわぐ場面があった。このようにクッでは臨機応変なアドリブが加えられる。

[25] チョゴンポンプリについては『韓国の民間信仰　資料編』（pp.95-125）参照。

[26] イゴンポンプリについては『韓国の民間信仰　資料編』（pp.126-142）参照。

[27] サンゴンポンプリについては『韓国の民間信仰　資料編』（pp.148-156）参照。

[28] セギョンポンプリについては『韓国の民間信仰　資料編』（pp.157-185）参照。

[29] サマニポンプリについては『済州島巫俗の研究』（p.400）参照。

[30] 本主は姜シンバンにおぶわれて部屋に連れて行かれ、鶏は蹴飛ばされて逃げていった。

[31] 兎山上堂ポンプリについては『韓国の民間信仰　資料編』（pp.35-42）参照。

[32] チルソンポンプリについては『韓国の民間信仰　資料編』（pp.246-258）参照。

[33] シワンマジは葬式の日にも行なわれる。地獄の門を開けて死者は極楽に行くという。

[34] タンジュマジ（堂主マジ）ともいわれるが、今回のクッではシンバンたちはサムシワンマジと呼んでいたので、ここではサムシワンマジと記す。

[35] 差使ポンプリについては『韓国の民間信仰　資料編』（pp.196-225）参照。

[36] クッの仲間内で一番重要なことは公平にお金を分けるということである。模擬的なお金の分配をすることによって、公平な分配の重要性を学んでいくのであろう。

[37] 玄は、これはサムシワンの霊力をシンバンがいただくのを意味するという（玄1985:121）。

[38] 前生の因縁を司る神に対する巫儀であるという（玄1985: pp.305 - 309）。

[39] 龍王神は位の低い神なので最後に招くのだという。

[40] 野村も「神クッは神に仕えるものがみずからの来し方を振り返りつつ、先輩のシンバンを招いて済州島の神事をすべて再現する儀礼である」と述べている（野村1999：320）。

[41] 筆者は鄭氏とクッで何回かお会いしている。数日間泊りがけのクッにも同行したことがあるので快くインタビューに応じてくれた。

[42] クンクッも同様であった。